

永瀬清子の詩「星座の娘」論

—— 第一詩集『グレンデルの母親』へ至る過程 ——

白根直子

はじめに

以前、拙稿で永瀬清子の初期の詩作について、ローザ・ルクセンブルクと野上弥生子の小説『真知子』を通して考察し、永瀬清子の第一詩集『グレンデルの母親』に至る序論にしたいと試みたことがある^{注1)}。本稿ではその内容を受け、詩「星座の娘」に注目し、第一詩集『グレンデルの母親』に至る過程を探っていくきたい。

まずは前述した拙稿の内容について概観しておこう。永瀬清子が大正時代の様々な思潮にふれるきっかけを作った人物に、永瀬清子の従兄で京都帝国大学医学部に在籍していた内田住夫と、愛知県第一高等女学校の恩師のひとり村瀬示路^{じろう}がいる。この二人に注目し、彼らにまつわるエピソードを検討していくと、

永瀬清子は彼らから教示を受けた学問を通じて社会へのまなざしが育まれ、そのまなざしは詩に反映されていることが浮かびあがってきた。

さらに永瀬清子が刊行直後に入手したと考えられる井口孝親による初の邦訳『ローザ・ルクセンブルグの手紙』（同人社書店 一九二五年八月）には、長谷川如是閑が「序」を寄せている。ここで長谷川如是閑は、ローザ・ルクセンブルクを「現代の生命を生かして行く女性」と捉え、「現代の女性」と述べており、彼女の「生涯の社会的意義」を「高く輝かしいその性格」のもと、「彼女自から、その現代的性格を超越して、もつと低い大地の上に立ち働いたところ」に注目している^{注2)}。この長谷川如是閑が見出したローザ・ルクセンブルクへの視点は、永瀬清子の詩作や、野上弥生子の小説『真知子』において次の点で通じるのではないかと考えられる。

すなわち、野上弥生子は『真知子』に主人公真知子が学問を通じて世の中を見、そこにいる自分の位置を確認し、社会主義運動に身を投じた学友の生き方を見つめながら、自分の生命を生かす生き方を選び取ろうとする姿を描いている。これは、『真知子』が書かれた時代に生きた女性のなかでも、主に学問をした女性に生まれた問題であろう。前述のとおり永瀬清子も学問を通じて社会へのまなざしが育まれ、社会の中にある「私」の視点で詩を書いていると考えられる。したがって、ローザ・ルクセンブルクへの共感を背景にし、おかれた場所で生命を生かす生き方を選び取るために、学問を通じて世の中を見つめなおしているところが両者の共通点といえよう。

ならば、両者の違いは、自分の生命を生かす道として、真知子は河井との結婚を選んだことに対し、永瀬清子は結婚があくまでも逃れられない現実であることを受け入れつつ、自分の生命を生かすのは、詩作であると考えた点にあるのではないだろうか。

本稿では詩「星座の娘」を考察し、永瀬清子が詩作を通じてどのように社会と自分自身を見つめ、詩を書きはじめたかについて的一端を明らかにすることで、第一詩集『グレンデルの母親』を刊行するに至る過程を見出すことを目的としたい。

一 詩「星座の娘」

では、最初に詩「星座の娘」(『グレンデルの母親』歌人房一九三〇年十一月)を分析してみたい。永瀬清子は一九二二年三月に石川県立第二高等女学校を卒業した。卒業後には上級学校への進学を希望したもののかなわず、その二年後の一九二四年四月に新設された愛知県第一高等女学校高等科英語部(現愛知県立明和高等学校)に入学することで勉強する機会を得ている。当時の永瀬清子は自分の意に沿わずとも両親の薦める人と結婚をしなければならぬという悩みを抱えていた。そして、「女性のこのような悩みはかつて書かれはしなかった」と考え、詩「星座の娘」を書くのである^{注30}。まず全文をあげておこう。

星座の娘

身近くせまつて来る人々の愛が
夜更けには

私の肉身の部分部分を作つてゐる
魂がそれらの中を流れめぐり

私は

巨いなる天空の神話の娘が
星の鉾でとめられてゐるみたいな束縛を感じる。

星々は夜には

幾多の宿命を含む地上からの視線で
原始以来みがかれた鉱物だ

北より南よりの

喜び悲しみを惹いて

重い期待を集めてゐる

私は私自身では

軽く飛びやすい者だけれど

それらの星に刺されてゐて

多くのつばみを含んだ椿のやうに感ずる。

暗い夜を通して私にまでうかび上る

花咲かうとする蜜にみちた熱意が苦しい。

星々の鬱血質の重さ！

自分はどの引力にまかしていいのか

私はどこへよろめくのか

夜が一刻一刻凝つてゆく時

天の神話の娘は

何万年はりきつた

星と星との銀緑の綱をたち切り

青い蜘蛛のごとく

しきりに空間へつりさがらうと意志しまいか

ああ多くの病める恩愛から

寒い自我を割きとつて

錘のやうに

唯一の重力を信じて下へ！ 下へ！

詩「星座の娘」は第一詩集『グレンデルの母親』に収録され、
自選のアンソロジー三冊に再録されている代表作のひとつで、
永瀬清子の詩作において重要な詩といえる。初出では「希願」
の題名で、『新生』第四卷第三号（一九二七年三月）に掲載さ
れている。^{注40}

続いて、どのような内容をもつのか確認してみたい。冒頭で
「身近くせまつて来る人々の愛が／夜更けには／私の肉身の部
分部分を作つてゐる」と、「私」は生まれた時から肉親に愛情

深く見守られて育っていることを述べている。よって「私」の肉体は、その愛情でつくられていると、肉親と「私」のつながりが、愛情を土台にした生命の連鎖であることを述べている。けれども「私」は、そうした肉親に対して肯定的に捉えるばかりではないために、「魂がそれらの中を流れめぐり／私は／巨いなる天空の神話の娘が／星の鉄でとめられてあるみたいな束縛を感じる」ととまどい迷う様子を示している。

つまり「私」にとってはそうした肉親の愛情や、つながりによつて身動きがとれない様子を描くことで、肉親の愛情を無条件に肯定しきれない理由を述べている。その様子はさらに詳しく描写され、「私」を「巨いなる天空の神話の娘」に譬えて天上に在ることを述べるものの、天上に在る「私」は、「星の鉄でとめられてあるみたいな束縛を感じる。」と不自由さを表現している。つまり、自由に天を駆けめぐることできる「神話の娘」であっても、決して自由ではないことをさらに強調しているといえよう。

その「神話の娘」である「私」が束縛されている様子を象徴的に表現しているのが星である。人間は神話の中で自由に動いている神々を星に見出し、意味づけをすることで神々を天空にとどめてしまった。そこで「星々は夜には／幾多の宿命を含む

地上からの視線で／原始以来みがかれた鉱物だ」と、神話と星との関係を地上から向けられる様々な宿命により位置づけている。それを受けて「北より南よりの／喜び悲しみを惹いて／重い期待を集めてゐる」と、神話を下敷きにして肉親の深い愛情の重さを示し、天空を眺める人々の心のありかたを表現している。そればかりか、「星座の娘」は、星の運行に従った動きしかできないために、「私」の不自由さも察知されるだろう。

そもそも「私」は「神話の娘」、すなわち神話の中の神々のように自由に動くことができる存在である。ところが、星座として天空にとどめられているために、「軽く飛びやすい者だけだ／それらの星に刺されてゐて」と身動きがとれなくなっている。そのように不自由な状態ではあるが、「多くのつばみを含んだ椿のやうに感ずる」と、一方ではこれから花咲こうとする椿に、再び天空を駆けめぐるができるであろう未来ある「私」の姿を譬えている。

その未来ある「私」は、「天の神話の娘は／何万年はりきつた／星と星との銀緑の綱をたち切り」と、本来ならば「たち切る」ことなどできない肉親から離れようとする意志を述べ、さらにその意志により、「青い蜘蛛のごとく／しきりに空間へつりさがらうと意志しまいか」と、地上でも天上でもない中空へと

どまろうと試みている。つまり自由の象徴である「神話の娘」と、そうない現実を象徴した「星座の娘」のどちらでもない「私」の現実を表現すると「空間につりさがらうと」することになるのではないだろうか。

したがって、「私」は、肉親が「私」に対して注ぐ愛情に感謝しながらも、その愛情は「私」にとつては束縛でしかなく、「私」の望む自由を与える愛情ではないことを捉えるがゆえに、「ああ多くの病める恩愛から」と表現せざるを得なかったのかもしれない。そこで「私」は、「寒い自我を割きとつて」とあるように、肉親の愛情にはおさまりきらない「私」を、意を決して切り離してしまう。そして、自由をもとめてやまない「私」は、「錘のやうに／唯一の重力を信じて下へ！ 下へ！」と向かつていくのである。

つまり、自由を手にしていた「神話の娘」の「私」は、肉親の愛情により束縛される「星座の娘」になってしまった。どうやらこのままでは、「神話の娘」の「私」が手にしていた自由は戻りそうもない。また、肉親は「幾多の宿命を含む地上からの視線」で「私」を見つめ続けており、「私」は自由である「神話の娘」ではなく、天上にいるものの「地上からの視線」で束縛されている「星座の娘」である。そこで「私」はその現実を

受けとめ、「私」が望むような自由が得られそうにもない天上ではなく、地上に新たな意味を見出そうとされていると考えられる。このように詩「星座の娘」には「私」が捉えた肉親との関係や「私」の心の動きが神話や星座に託され、象徴的に表現されているといえるだろう。

二 「神話の娘」と「星座の娘」

ここで詩「星座の娘」について、注目しておきたいことが二つある。一つは前述のように初出は「希願」で収録時は「星座の娘」と題名が異なることである。もう一つは「神話の娘」と「星座の娘」とは書き分けられていることである。ここには、詩「星座の娘」を理解する手がかりがあるのではないだろうか。

まず前述のように、「神話の娘」は自由に天を駆けめぐることのできる「私」の象徴であり、同時に理想である。けれども「星の鏡でとめられ」ることで「神話の娘」は「星座の娘」となる。つまりギリシア神話の中で自由に動き回れる神々が星座になると人間に意味づけられ固定されてしまう。したがって、「星座の娘」はそのような自由を奪われた「私」の象徴といえよう。ならば題名に「神話の娘」ではなく「星座の娘」を選んだこと

には、両者の対比があるばかりではなく、身体とともに心の自由が奪われていることをも、より強く表現しようとしていることがうかがえる。

このことをもう少し深く考えていくためには、永瀬清子が詩「星座の娘」を書いた理由を次のように述べていることにヒントがあると思われる。^{注5}

もし私が男なら一家の責任をとる事くらい何とも思わぬであろうに。また世界中にそれまでに書かれた詩も内外ともに殆ど男性の詩であり、女性のような悩みはかつて書かれはしなかった。今私は国によって、家によって、また親の愛情によってがんにがために圧さえられていて、どうすることもできない。しかしただ他の何にも頼らず詩を書く事によってのみ自由であろうと心を決めた。

（傍線筆者・以下同）

「女性のこのような悩みはかつて書かれはしなかった」とあるように、永瀬清子は女性が家制度に縛られるばかりではなく、「親の愛情」にも縛られている状態についての複雑な悩みを詩「星座の娘」に託した。大正時代には、米沢順子、澤ゆき子、中田信子、高群逸枝、英美子といった女性詩人がおり、中でも高群逸枝は女性解放の願いをこめた詩集『東京は熱病にか、つ

てゐる』を一九二五年に刊行し、社会における女性一般の問題を詩に書いている。そのような視点での詩は書かれていたものの、永瀬清子のように自分自身の問題として社会の動きを捉え、そこにいる自分の心を描いた詩は、これまで書かれていなかったのではないだろうか。

また、一九二七年秋に永瀬清子が両親の選んだ人と結婚した事については次のような考えがあった。^{注6}

彼はすこし前に東京帝大の法科を卒業し大阪につとめていたが、次男なのでこちらの家を継ぐ事も可能なのであった。それまで父母を悩ましていた私は父母ともう争いたくなくなつて居り、そして、私のすべてを理解してくれる人はこの世には絶対にはないのだと心を決めれば、逆に父母にあまり気づかわれるよりも、結婚によって自分の新たな自由の道を探す方がよいのだと思うに至った。

つまり、結婚問題について「父母ともう争いたくなくなつて居り」とあるように、両親と様々な話し合いや争いをし続けることに疲れ、どれだけ待ってみたところで「私のすべてを理解してくれる人」が現れるわけではないという現実的な考えに至り、「結婚によって自分の新たな自由の道を探す方がよい」と、自分の運命を受け入れ、そこでどのように自分の生命を生かして

いくべきかを考えることに最善の道を見出している。

また時代は下るが、晩年に発表した詩「女の戦い」には、「姑になるべきその人」からの「あの子はこれまでいつも我ままに育てましたけえ／あんたもこれからあの子の云う事は／とても悪うても絶対さからわんで下さいよ」の言葉を、「それにしても大上段の大憲章」^{マツナカカルタ}と貴族の「姑」が王である「私」に「大憲章」^{マグナカルタ}をつきつけたと表現する詩句や、「彼は殿様じゃないぞ、私は腰元じゃないぞ」の詩句などがみられる^(注7)。「私」は夫よりも立場が上であることを主張した高踏的ともいえるこれらの表現の延長線上には、当時の永瀬清子の意識が端的にうかがえ、年月を経てなお生々しい感覚が甦ってきたかのような表現をとっている。いずれにしても新婚の頃の「私」は地上にはおらず、「神話の娘」である「私」の視点で書かれているために、夫や姑よりもまぎれもなく高いところにいるという意識がうかがえる。つまり、この意識は天と地、すなわち上下方向を捉えた意識といえるだろう。

では、この上下方向の意識について同時代の作品と比較し、詩「星座の娘」の特徴をつかむことで「神話の娘」と「星座の娘」の差異が浮かびあがってくるのではないだろうか。

以前、拙稿で、詩集『グレンデルの母親』に収録している

三九篇の詩には、「私」という一人称で上下の方向性を捉えた詩が全体の約三分の一にあたる一四篇あり、それらには①「天↑地」、②「天↓地」、③「地↓海・天」という三つの傾向がうかがえるばかりか、年代順に追っていくと一九二八年から一九二九年前半には①の傾向をもつ詩が多いものの一九二九年の終わりから一九三〇年には下降した意識があることに言及したことがある^(注8)。つまり永瀬清子の詩想には、上下方向の意識があり、それは永瀬清子の心の動きを反映していることがうかがえるばかりか、詩想の根幹であることが判明した。

そしてこの上下方向の意識について考察を加えたいのは、詩集『グレンデルの母親』に収録された詩のなかで、詩「星座の娘」のみが②の傾向をもつ詩であり、年代順にみるとこの詩を境に地上からの意識で詩が書かれていることである。この詩のみがこのような傾向をもち、詩作における転機となった理由には、前述のように永瀬清子の結婚にまつわる様々な問題が背景にあるのではないだろうか。

ならば、これら様々な問題と、「希願」から「星座の娘」への改題の問題は、少なからずかかわってくるのではないかと考えられる。前述のように、詩「星座の娘」は雑誌には「希願」の題名で発表されているが、詩集収録にあたって「星座の娘」

に改題されている。「星座の娘」を題名にすると「神話の娘」であることを願う「私」の願いはもちろん強調されているが、それ以上に「私」の悩みのありかたが象徴的に表現されるばかりか、この題名にすることで「唯一の重力を信じて下へ！下へ！」と下降することは、不本意であっても「神話の娘」であった「私」の意志として「下」すなわち地上を選び取った、「私」の葛藤がよりくつきりと浮かびあがってくる。

さらにこの詩の中では、肉親は地上にあり、「神話の娘」である「私」は不本意ながら「星座の娘」として束縛されて天上にいる。けれども、その高いところから降りて、肉親のいる地上で生きることを選びとろうとしている。この選択は、自由に天をかけまわることを理想とする「神話の娘」にとつてはつらい選択であろうと察せられる。けれども束縛されたままの「星座の娘」であるよりも、新たな自由を地上に求める姿は、自由を謳歌する「神話の娘」ならではの高みを求める姿と思えてならない。このように考えていくと初出時の題名が「希願」のままであるならば、「神話の娘」であることを願う気持ちは強調されるものの、前述のような「私」の葛藤や「下へ！下へ！」と地上を目指す意味は伝わりにくいと思われる。したがって「星座の娘」を題名に選ぶことで「神話の娘」と

の対比がなされ、肉親の愛情に応えたいと願いつつも自分の生き方は自分で選びたいという「私」の葛藤が詩全体を貫くことになり、詩そのものの意味が伝わりやすくなるだろう。また、前掲のエピソードを背景に詩「星座の娘」が書かれていることは、その傍証となるのではないだろうか。

このような永瀬清子の地上への意識については、新井豊美氏がすでに「下とはすなわち大地の上、この若い娘は地上こそ自分の生きる場所であり、そこ以外に自分の場所はないというきわめて覚めた認識を持っていた」と「私」の位置を指摘し、永瀬清子を「現実主義者、屈折したリアリストである詩人」と捉えていることに注目したい。新井氏の指摘は、永瀬清子の選択を的確に捉えていると考えられる。

新井氏がこのように捉えているのは、地上を「女性としての彼女（＝永瀬清子・筆者注）が生きる場所」と、女性が産む性であるゆえに夫や子どもなどと「きずなを断ち切ることができない」場所と考えるからであろう。それゆえ地上は「天を仰ぎ詩を求める場所」となり、そこで書くことが女性の詩の現実であることを捉えているからではないだろうか^{注9）}。

永瀬清子の苦悩は一面からすれば、肉親の愛情に應える以外の道を選べなかったことに他ならない。これは「きずなを断ち

切ることができな」かったということである。けれども、永瀬清子は両親の意思を自らの意志として生きるという現実を受け入れ、置かれた場所で生きていくことに目を向けていく葛藤を詩「星座の娘」に書き、「女性としての彼女が生きる場所」を選びとっている。ここには、永瀬清子自ら「女性のこのような悩みはかつて書かれはしなかった」と書いているように、これまで見逃されてきた同時代の女性のものつ悩みの一面が詩に書かれたことで、「女性としての彼女が生きる場所」が発見されたといえるであろう。また、前述のように、この詩以後の詩は①「天↑地」や③「地↓海・天」のように、「天を仰ぎ詩を求める場所」から書かれていることも、新井氏の指摘に通じるのである。

このようにみていくと永瀬清子の詩作は、長谷川如是閑がローザ・ルクセンブルクについて、「現代の女性」の「生命を生かして行く」生き方を「彼女自から、その現代的性格を超越して、もつと低い大地の上に立ち働いたところ」と捉えて評価したことを想起させる。同様に、野上弥生子が小説『真知子』で描いたように、「理想の社会」をつくるための運動に参加するのでもなく、親の勧めるままに結婚するのでもなく自分の「生命を生かして行く」生き方を考え抜いた結果、河井との結婚と

いう第三の道を選んだ、真知子に通じる考え方が永瀬清子にもあったと思われるのである。すなわち愛知県第一高等女学校時代に育まれた社会へのまなざしと、同じ時期に両親から結婚を勧められ続けたことで、「ただ他の何にも頼らず詩を書く事によつてのみ自由であろうと心を決めた」という強い意志が詩を書かせ、詩「星座の娘」が生まれ、自ら書いた「唯一の重力を信じて下へ！ 下へ！」の詩句を現実のものにしていったと捉えられるのではないだろうか。

つまり、永瀬清子もまた理想である「神話の娘」でも、現実の「星座の娘」でもない生き方、すなわち「神話の娘」として地上で生きることを選びとろうとしているために、「唯一の重力を信じて下へ！ 下へ！」と地上を目指したといえよう。それは、ローザ・ルクセンブルクが高みではなく「もつと低い大地の上に立ち働いたところ」を目指したことに通じる「生命を生かして行く」生き方であろう。「神話の娘」と「星座の娘」の書き分けと改題は、このような「私」の意志をより明確に伝えるために行われたと考えられる。

三 詩「星座の娘」から詩集『グレンデルの母親』へ

さて、第一詩集『グレンデルの母親』には、「女性のこのような悩みはかつて書かれはしなかった」との思いから書かれた詩「星座の娘」をはじめとする詩が収録されている。そこで永瀬清子の第一詩集『グレンデルの母親』の「自序」を少し長いが全文引用し、これまで読み解いてきた詩「星座の娘」が詩集『グレンデルの母親』につながっていく過程を見出していきたい

〔注10〕

私の詩は自由へのあこがれと共に成長した。

或は社会的には実に小児的で個人主義を多く出ないものであらうとも、私の詩はただ自由へのはげしき呼びかけを意味した。無意識的にも。

私の旧き階級的生れ、及び境遇、性格はすでに運命である。私のこの運命の地点から、すでに傾ける階級の十重二十重の形式過重性を身を感じ、それは「詩」なる叫びをあげずにゐられなかつた。

もしもこの咏嘆的態度を、詩への、もはや過去に属する面

し方だと嗤ふ人があらうとも、又社会性なき自慰であると黙殺する人があらうとも、これは私にとつての必然であつた。唯物的に説明することもごく容易い程の宿命的事実ではあつた。

たゞ私は詩をとほして成長する。多くのものをふみくदैてゆきたい。こんな宿命をもつことは、別に客観的な事実としての一つの条件以外の何物でもない。要はいかに明日へのためにこれを役立てるかにある。

かうして一冊として投げ出したからには別に卑下しやうとは考へてゐない。

けれどもこれらもはや過去に属する自分に対して、一応のきびしい批判はもつてゐるつもりである。

これら卒業記念としての詩たちを世に出すのは、しかし、愛してゐるからだ。

私の幼い六ヶ年の日も月も、思ひ出もこもつてゐる。これは私の生命のかげら自身である。

芸術は鬘のやうなもの

彼自身の奔る時にこそ美しい旗じるしの如くある。

これは別に奔る道具ではないのだが。

私はそのやうに芸術したいと思ふ。

我が髪よ、なびけ。

「私の詩は自由へのあこがれと共に成長した」で始まっているように、詩を書く理由には「自由へのあこがれ」があつたことがわかる。続けて、「私の旧き階級的な生れ、及び境遇、性格はすでに運命である。私のこの運命の地点から、すでに傾ける階級の十重二十重の形式過重性を身に感じ、それは『詩』なる叫びをあげずにゐられなかつた」とあるように、誰しも逃れることができない生まれついてもっている「旧き階級的な生れ、及び境遇、性格」が詩を書かせたことを述べている。それも単に詩を書かされたのではなく、『詩』なる叫びをあげずにゐられなかつた」とあることで詩を書く必然性を強調していることがうかがえる。

永瀬清子の生家は現在の岡山県赤磐市松木にあり、両親とも永瀬姓で母方は永瀬家の本家にあたり当時「大永瀬」とよばれる有力な一族であつた。一方、父方は呉服商を営む地主で、永瀬清子の父は電気技師として金沢や名古屋などに勤務していた

ため不在地主であつた^{（注1）}。永瀬清子は、このような恵まれた家に生まれたからこそ学問をすることができたことは承知のうえであつたであろうが、「私の旧き階級的な生れ、及び境遇、性格はすでに運命である」と、自身の立場はどうしようもなく、変えることのできないものであることに自覚的である。

そのうえで「唯物的に説明することもごく容易い程の宿命的事実」と、逃れられない運命が事実であることを受け入れ、「たゞ私は詩をとほして成長する」と、「私」は思うにまかせられない状況であるものの、そこにとどまらず詩を書くことで踏み出そうとしている。それゆえに「要はいかに明日へのためにこれを役立てるかにある」と、「私」が少しでも自分自身の成長を考えていくことの必要を冷静に促す。

そのように書かれた詩について「別に卑下しやうとは考へてゐない」「これらもはや過去に属する自分に対して、一応のきびしい批判はもつてゐるつもりである」と否定はしないが、かといって無条件に肯定するつもりもないと、自分に対して客観的であろうとする態度を示している。その理由を「私の生命のかげら自身である」と、詩を自分の生命の一部分と考えているためであると述べている。つまり生命は絶えず動き変化していくとどまらないものであり、過去の詩はその時点での「私」が

記録されているものの、後から読み返せば不十分で行き届かなくとも、生命がとどまらないものである以上、過去への「一応のきびしい批判はもつてゐるつもりである」と考えるからだろう。そしてここまで書いてきた詩を「卒業記念」と考えるのは、天上で自由を手にする「神話の娘」が理想であることは変わらないが、その理想を現実にするために、天上で生きるように地上で生きようとすることを選んだことによる。それが「私の生命のかげら自身である」と、肉親と「私」のつながりが愛情を土台にした生命の連鎖であるように、詩と「私」も同様の関係にあることを示す表現となる。

そこで「芸術は蠶のやうなもの／彼自身の奔る時にこそ美しい旗じるしの如くある」と、躍動する生命のかげらを「蠶」に譬えて芸術が自律的なものであると表現している。つまり、生命は絶えず動き変化していきとどまらないものであり、過去の詩はその時点で「私」の記録である。ゆえに生命がとどまることのないものである以上、後から読み返せば不十分で行き届かないこともあるため、過去への「一応きびしい批判はもつてゐるつもり」と考えるのではないだろうか。

だからこそ最後に「私はそのやうに芸術したいと思ふ。／我が髪よ、なびけ。」と、冒頭での「自由へのあこがれ」から成

長した結果、「私」の「芸術」の在り方を、「星の鋌でとめられてゐるみたいな束縛を感じる」という「星座の娘」ではなく、天空を自由にかけめぐることのできる「神話の娘」として最後に力強く高らかに宣言するのであらう。

ここには以前考察したように、永瀬清子が自身と詩作を植物、なかでも樹木に等しいものと捉えていたことと少なからず関係すると思われる^{（注12）}。つまり、永瀬清子は樹木が葉を茂らせた^{（注12）}り、花を咲かせたり、落葉したりというように季節のめぐりによる変化を、樹木自体の形式と内容の一致した表現でありながら、生命のかたちの完成を目指す意志とみなしており、表現しようとする内容をどのような形式で書くかということと、それらが一致した文学への関心を抱いていたと考えられるからである。

そしてこの関心を、前掲の①～③のような上下の方向意識に照らし合わせてみると、詩「星座の娘」以後の詩は地上から天上を目指すという方向性をもつ詩になっていることは前述のとおりである。なかでも詩「土の表現」には、植物が土という芸術家による作品であり、「土の精神」すなわち「太陽への信仰」や「成長欲」「感情」「生命力」「意志」が、天に向かって伸びる「植物」となり、「空への想ひの梯子となるもの」と天地を

結ぶ存在でもあると捉えているのである。永瀬清子は自身の詩の理想を「美しい言葉の絶頂は、うるわしい人間のころの絶頂と重なる」と考えており^{〔註13〕}、「私の旧き階級的生れ及び境遇、性格はすでに運命である」と受け入れ、これらを養分にしながら「私の生命のかけら自身である」と、詩を書いていくことで理想に到達しようとしている。

つまり、地上で生きることを決意した表れとして詩「星座の娘」が書かれた後は、天上への心を残しながらもあくまでも地上からの視点で詩を書いており、そうした心情が第一詩集『グレンデルの母親』の「自序」にあますところなく書かれているといえよう。さらに「自序」と同時期に書かれたと考えられる散文「友と我に語る」(『五人』第一集 一九三〇年一〇月)には、芸術を「どんなすき間からでもはえてくる植物みたいなもの」と捉え、「ローザ・ルクセンブルクが獄屋の窓に雀の声をきいてのやさしい思ひは、常に戦ひのうちにも胸に発酵してゐたのだ」と、『ローザ・ルクセンブルクの手紙』をふまえた記述がある。ローザ・ルクセンブルクが「戦ひのうちにも」自然への共感を表現せずにいられたなかったことに共鳴し、永瀬清子も植物の生命力に共感し『詩』なる叫びをあげずにゐられなかった」と捉えることができるだろう。また同詩集の表題作である詩「グ

レンデルの母親は」には、「凄愴たる犠牲者の中をも／孤りでサブライムの方へ歩んでゆくだらう」とある^{〔註14〕}。このように高みを目指す「私」の姿は、束縛されたままの「星座の娘」ではなく、新たな自由を地上に求める「神話の娘」が高みを求めている姿を彷彿させる。

このように詩集『グレンデルの母親』の「自序」には、永瀬清子が詩を書く必然性が書かれているのみならず、前述のように長谷川如是閑が「ローザ・ルクセンブルグの手紙」の「序」で述べた「現代の生命を生かして行く女性」に通じる姿や、小説『真知子』の主人公真知子が第三の道を選んだように、詩を書くことでローザ・ルクセンブルクのように自分の「生命を生かして行く」ことを決めた永瀬清子の姿がうかがいあがってくるようである。このような永瀬清子の意志が、「私の生命のかけら自身である」と詩「星座の娘」をはじめ数々の詩に書かれ、第一詩集『グレンデルの母親』に結実していったのではないかと考えられる。

おわりに

「神話の娘」の「私」は「星座の娘」となり、さらには地上

に降り、ここではないどこかではなく置かれた場所で生きること、すなわち「神話の娘」のように地上で生きることを選びとった。このことが、永瀬清子にとっては詩を書くことであつたといえるであろう。

テキストは、原則として詩集所収の詩は初出の初版本による。旧漢字は新漢字に改めた。傍線はすべて筆者による。

注1 「永瀬清子とローザ・ルクセンブルク―野上弥生子の小

説『真知子』に注目して―」『工藤進思郎先生退職記念論文・

随想集』工藤進思郎先生退職記念の会編 二〇〇九年七月

2 長谷川如是閑「序」井口孝親訳『ローザ・ルクセンブルグの手紙』同人社書店 一九二五年八月 一―四頁

3 『すぎ去ればすべてなつかしい日々』福武書店
一九九〇年六月 七四頁

4 拙稿「永瀬清子の詩「土の表現」における〈梯子〉―『創世記』と水彩画「ヤコブの梯子」に注目して―」（『清心語文』第七号 二〇〇五年七月）では、第二詩集『グレンデルの母親』には、詩の末尾に年月の記載があり、初出が判明している詩について対照すると、一致する、もしくは一

カ月程度のずれが見受けられる。この理由として作品完成年月と掲載年月の違いがまず想定できるとした。しかしながら詩「星座の娘」のみ、そのずれが大きい。詩「星座の娘」の初出として確認できたのは、本文中にあるように詩誌『新生』第四卷第三号（一九二七年三月）であるが、詩集『グレンデルの母親』には「一九二六・一」とある。永瀬清子の場合、同じ作品を同月の他誌に発表したり、少し時間をおいて発表したりしている例が散見される。例を挙げるならば、詩「身辺」は、題名はそのままですしずつ詩句や連を変えて、『女人詩』第十二号（一九三三年十一月）、『女性詩歌』第一卷第三号（一九三三年十二月）、『詩の國』第三号（一九三三年十二月）の三種の雑誌に掲載されている。また、詩「睡り」は『五人』第三号（一九三一年三月）に発表後、詩「睡る」に改題して『詩神』第七卷第五号（一九三一年七月）に掲載されている。したがって詩「星座の娘」の初出年月は、詩誌『新生』に発表した時期よりも今少し早い時期である可能性を捨てきれない。

5 注3に同じ 七四頁

6 注3に同じ 七五頁

7 『あけがたにくる人よ』思潮社 一九八七年六月

一一〇頁

8 注4に同じ

9 『近代女性詩を読む』思潮社 二〇〇〇年八月 一三五頁・一四八頁 このほかに井久保伊登子「星座の娘―宿命の絆からの自由を求めて―」（『女性史の中の永瀬清子―戦前・戦中篇』ドメス出版 二〇〇七年一月）で詩「星座の娘」の改題理由を推察しその概略程度ふれている。

10 永瀬清子「自序」『グレンデルの母親』歌人房
一九三〇年一月 一―二頁

11 永瀬清子が詩を書きはじめた頃の岡山県赤磐郡豊田村の小作争議については、坂本忠次『大正デモクラシー期の経済社会運動』御茶の水書房 一九九〇年六月）で報告され、論じられている。

12 拙稿「永瀬清子の〈樹木〉をめぐる詩想 ―詩「梢」と宮沢賢治―」『清心語文』第六号 二〇〇四年八月

13 「宮沢賢治のほとり―わが五十年のあゆみ―」『宮沢賢治』第四号 一九八四年五月 一九二頁

14 『グレンデルの母親』歌人房 一九三〇年一月 八頁
（しらね なおこ／博士後期課程三年在籍）